

# 清末の『点石斎画報』にみる外国観

永 崎 道 子

永崎 道子

## 要旨

本稿は、1884年から1898年の約14年の間に、清朝の江蘇省上海を中心に刊行された『点石齋画報』<sup>てんせきさいがほう</sup>を用いて、当時の中国人が肌で感じた「外国」あるいは「外国観」を明らかにしようとするものである。

第1章では、『点石齋画報』の内容紹介と外国関連記事の傾向について、先行研究にみえる画報についての基礎的な知識と、研究対象となる外国関連記事の整理とを行った。画報の発行にあたっては、喜ぶべきことや驚くべきことを投稿する画家を募っていた。膨大な記事の内、本稿が研究対象とする外国関連記事は、画報枚数全体の22%に及ぶことがわかり、その内容が多岐にわたり話題の豊富なことに驚かされた。清末の人々が『点石齋画報』を通じて描いた世界地図が、想像以上に広範囲に及んでいることが明らかとなった。

第2章では、清末の画報文化と『点石齋画報』についてそれぞれ記し、『点石齋画報』の外国観に迫る足掛かりとし、画報文化を受容した清末の社会的背景を、印刷技術、画報の流行、読み手についての把握を中心に分析した。『点石齋画報』は、中国の画報文化の先頭に立ち、競合各誌より早い時期に石印技術を導入し、読み手と書き手の確保に成功した。そこには、国際都市として機能していた上海が育んできた文化的な土壌が大きく関係していた。

第3章では、外国関連記事を話題などで分類し、鳥瞰して分析することで、その特徴をまとめた。中国と相手国との物理的、地理的、文化的な距離が記事における心象の違いを生み出している傾向を掴んだ。また、戦争などの不測の事態に直面してもどっしりと構える中国の姿勢が見えた。誇張と想像力の賜物ともいえる記事の幾枚かを通じては、『点石齋画報』の面白さに触れた。

第4章では、外国関連の記事の中でも特に西洋の影響のみられる話題とその特徴を考察し、画報にみえる西洋の新しい技術や文化の描かれ方から、読み手の気持ちに迫った。社会の移り変わりが激しい清末において、西洋文化の利用価値と異質性をみとめながら歩む姿が記事に現れていた。科学技術を軍事技術に転用する視点や、革新的な治療法に思わず希望を抱く姿、あるいは、旧社会の堅苦しい伝統文化への疑問の芽生えが、『点石齋画報』の記事の中にみられた。

第5章では、同じ話題について数年を置いての比較や、同一の新聞社から出版された新聞と画報の記事の比較を通じて、外国関連記事の変化の過程を探った。発行時期や文字と絵の違いを意識しながら、『点石齋画報』の10年の歩みをみていくと、画報の技術的な進歩、文字部分の書かれ方、中国の外国との距離の取り方に変化がみられた。記事の描かれ方は、外国や外国人の印象を捉えるものから、

捉えた印象や知識をどのように取り扱うのかを投げかけるものへと変わり、編集者の意識が見えやすい記事の構成となっていった。

『点石齋画報』にみえる外国観は、同時代の知識人が有していた外国観の歩みと比較した時、その先頭を進むような革新的なものではないが、知識人を含めた『点石齋画報』の読手たちを惹きつける新鮮さと発見に満ちていたと言える。

清末史においては、アヘン戦争や、日清戦争が契機となって、中国と諸外国との関係が段階的に変化するということが知られている。本稿で分析した、画報にみる人々が肌で感じた外国観については、この道筋から飛び出して目にも驚きの成果をあげるように軽快には進まなかった。史料に対しては、まず量的に分析分類し表を作成した。この表は本論集では、字数の関係で割愛した。様々な切り口で画報を眺めることで、記事に描かれる話題以外での共通点を探すことに努めた。編集や描き手に迫るための史料の不足などの問題が見えてきた。本稿の問題意識は、時として歴史の変動の中で忘れられやすい、権力を手にしていない清末の人々の外国観に迫ることにある。先に述べたような『点石齋画報』の分析から、記事の言葉の中の小さな突破口を見つけることは難しく力の及ばぬ点もあったが、近年立て続けに出版されている先行研究に倣い、学ぶことも多くあった。また、忘れてはならないのが、『点石齋画報』がイギリス人の手で刊行されたという事実である。その意味では、『点石齋画報』を含めた画報の詳細な分析から、中国とイギリス、あるいはそれ以外の国との、出版物を介した静かな思惑を見つける可能性が期待できる。この点には、方法を模索しながらも、引き続き検討の余地がある。

永崎 道子

## はじめに

本稿は、1884年から1898年の約14年の間に、清朝の江蘇省上海を中心に刊行された『点石斎画報』<sup>てんせきさいがほう</sup>を用いて、当時の中国人が肌で感じた「外国」あるいは「外国観」を明らかにしようとするものである。

清末以降の西洋文化の流入や中国と世界各国との新たな関わりを想定すれば、『点石斎画報』に描かれる清末時期の「外国」や「外国観」そのものを主題とすることで、中国と日本を含むアジアや欧米各国との繋がり的一端に迫ることができる。画報には、漢字の歴史と文化の中で、あえて絵を用いて情報を伝達した、史料としての特殊な性質がある。画報を通じて読み手が感じた「外国」の印象は、この時期の中国と外国の関係性的一端を、私たちに教えてくれる。

本稿で主として用いた大可堂版『点石斎画報』には、刊行当時の画報の縮小版と、文字部分の現代中国語訳が掲載されているが、刊行当時の画報の漢字部分を主要史料とする。本稿の分析は、主として「外国関連の記事」について行い、表記は大可堂版に倣う<sup>1</sup>。記事選別の基準は「内容や話題に具体的な国名」が記されているもの、「西洋」、「洋人」、「東洋」、「外国人」、「租界」などの記述があるものとする。

〈図1〉『点石斎画報』の一例



〔出所〕10 - 111 「西婦聚會」。

## 第1章 『点石齋画報』の創刊

『点石齋画報』<sup>てんせきさいがほう</sup>は、1884年5月8日（光緒10年4月14日）から1898年8月（光緒24年7月頃）までの約14年間に、上海で創刊された絵入りの新聞である。発行元の申報館<sup>しんぼうかん</sup>は1872年4月30日に上海で創業され、1949年5月まで存続した。申報館が発行した日刊新聞の『申報』は特に有名であり、中国で最も長い歴史を誇った。設立者は、イギリス人商人のアーネスト・メイジャー<sup>2</sup>と、兄のフレデリック・メイジャー、友人のウッドワード、プライヤー、ワシロップ等であり、画報の名前の由来は、申報館が付設した点石齋石印書局とされている<sup>3</sup>。この書局の名前の意味は「石を点じて金と成す」という<sup>4</sup>。発行は、月3回の旬刊、体裁は<sup>せんそうほん</sup>線装本、原則として各号8葉9図の構成で、表紙には「合計8葉、定価

〈表1〉『点石齋画報』の画家

	別名など	字	出身	その他
呉友如	呉嘉猷、呉猷	友如	江蘇省蘇州市元和県	張志謙は絵の師匠
金桂	桂生	蟾香	上海	
張淇		志瀛	上海	呉友如の絵の師匠
馬子明			上海	
呉貴		子美	上海	
顧月洲				
賈蘭卿			上海	
田英		子琳		
李煥堯			上海	
周權		慕喬	上海	
沈海坡				
王釗		毅卿	江蘇省蘇州市呉県	
何元俊		明甫	上海	
管念慈	横山樵客、蘆齋	幼安	江蘇省無錫市	
孫松		友之	浙江省寧波市鄞州区	
符節		良心	上海	
金庸伯				
金鼎		耐青	大興	
葛樽	葛尊、龍芷、雪齋	龍芝	海寧	
張文秉				
戴信		子謙		
朱鴻				朱儒賢と同一人物か
朱儒賢	如言	雲林		朱鴻と同一人物か

〔出所〕葉漢明、蔣英豪、黃永松編『点石齋画報通検』商務印書館、2007年、張奇明等編『点石齋画報』大可堂版（第1－15巻）、上海画報出版社、2001年、序文より筆者作成。



に招き、「金陵功臣戦績図」を描かせた<sup>11</sup>。

作成枚数と時期についての一定の傾向としては、画報の制作に恒常的に参加していた画家の人数は、時期ごとに4-5人であったと指摘できる。「各地の大画家先生へ。点席斎主人より<sup>12</sup>」には、臨時で活動する画家がいたことを示す記述が、「本齋では画報を月に数回出版しており、大変好評をいただいております。ただ他の都市の不思議な出来事については、『申報』に掲載している以外には、人物や絵を描く人がほとんどいません。そこで本齋は国内の画家先生にお願いしたく存じます。もし驚くべき事件や面白い事件などがありましたら、真っ白い紙と濃い墨で絵を描き、別紙に事件の次第をはっきりと記して、本齋までお送りください。巧妙で真に迫っている作品がございましたら画報に使用させていただき、原稿料として洋銀2元を支払います」とあり、画報の制作には大勢の画家が参加していたとわかる。一方で不明な点も多く、絵の制作は中国人が中心だが、会社の経営者は英国人であり、編集段階で経営側の意見がどの程度反映されたのか、史料で明

〈表3〉『点石齋画報』の外国関連記事

	全枚数	外国関連	国外	国内
1甲	105	41 39%	15 14%	26 25%
1乙	108	38 35%	4 4%	34 31%
1丙	109	34 31%	16 15%	18 17%
2丁	108	31 29%	15 14%	16 15%
2戊	108	31 29%	12 11%	19 18%
2己	114	57 50%	38 33%	19 17%
3庚	108	25 23%	7 6%	18 17%
3辛	108	28 26%	11 10%	17 16%
3壬	108	26 24%	13 12%	13 12%
4癸	108	25 23%	9 8%	16 15%
4子	102	22 22%	15 15%	7 7%
4丑	96	32 33%	22 23%	10 10%
5寅	94	16 17%	9 10%	7 7%
5卯	79	21 27%	14 18%	7 9%
5辰	80	13 16%	9 11%	4 5%
6巳	107	21 20%	9 8%	12 11%
6午	106	23 22%	15 14%	8 8%
6未	108	16 15%	10 9%	6 6%
7申	108	13 12%	11 10%	2 2%
7酉	108	17 16%	11 10%	6 6%
7戌	108	24 22%	16 15%	8 7%
8亥	108	17 16%	12 11%	5 5%
8金	108	23 21%	21 19%	2 2%
8石	108	22 20%	20 19%	2 2%
9糸	108	19 18%	13 12%	6 6%
9竹	108	16 15%	11 10%	5 5%
9匏	108	26 24%	22 20%	4 4%
10土	108	23 21%	18 17%	5 5%
10革	108	12 11%	9 8%	3 3%
10木	108	22 20%	10 9%	12 11%
11礼	108	11 10%	10 9%	1 1%
11藥	108	21 19%	16 15%	5 5%
11射	108	23 21%	7 6%	16 15%
12御	108	24 22%	16 15%	8 7%
12書	108	32 30%	6 6%	26 24%
12数	108	24 22%	6 6%	18 17%
13文	108	13 12%	10 9%	3 3%
13行	108	25 23%	15 14%	10 9%
13忠	108	24 22%	22 20%	2 2%
14信	108	19 18%	14 13%	5 5%
14元	108	23 21%	13 12%	10 9%
14亨	108	17 16%	14 13%	3 3%
15利	108	23 21%	15 14%	8 7%
15貞	108	18 17%	5 5%	13 12%
合計	4664	1031 22%	586 13%	445 10%

〔出所〕『点石齋画報』大可堂版より筆者作成。

永崎 道子

確に示すことはできない。

『点石齋画報』の4664枚の画報の内、「外国や外国人関連の記事」は1031枚で全体の22%で、その内「中国国外の出来事についての記事」は586枚、「中国国内の出来事についての記事」は445枚である。

登場する国は、39ヵ国、都市名や地名などの固有名詞は、中国以外だけで62ヵ所ほどである。絵画部分には群衆を除き、外国人では男性9590人、兵士2646人、女性1504人、子供347人ほどが、中国人では男性8449人、兵士2802人、女性981人、子供219人ほどが描かれ、記事の話題は多岐にわたっている。外国関連記事についての詳細な表は、字数の関係で割愛する。

清末中国人がこのように世界各国の様々なニュースに触れていた事実は大変興味深い。清末は西洋化の遅れが指摘され、民衆の外国に対する態度は旧社会に閉じこもっていたような印象があるが、実際には庶民が世界各国の記事を興味深く読んでいた可能性を指摘できる。また、外国関連記事は、恒常的に一定量掲載されていたと言える。

技術的な面では、遠近法に違和感を覚える。画報の植物や人間は、中国的な描き方がされており、同時代の西洋の画報などと比較してみるとその違いは一層明瞭で、立体感を増す影は描かれない。一方で建築物などは、一点透視図法や二点透視図法を用いて西洋画の手法を取り入れて描かれ、画報の前半と後半では、技術の進歩も見える。

## 第2章 画報文化と『点石齋画報』

中国で西洋式の印刷技術が導入された背景には、雍正帝が18世紀にキリスト教の民間での布教を禁止し、布教が印刷物頼みになったことがある。中国の印刷史では、伝統的木版印刷、西洋式活字印刷、西洋式石版印刷の3種が挙げられる<sup>13</sup>。中国の山水、都市、名所などを題材に、西

洋式的特徴を持って描かれる木版画は、雍正年間（1722－1735年）から乾隆年間（1736－1795年）には蘇州を中心に制作されていた<sup>14</sup>。

『点石齋画報』では、「照相石印」と呼ばれる技術を応用しており<sup>15</sup>、1878年、メイジャーは手動の石版印刷機を購入し、申報館に点石齋石印書局を組織した。土山湾印刷所の石版印刷技師から中国人の邱子昂きゅうすごうを招いた。「点席齋が出版する書籍、図画、碑帖、楹聯の価格。点席齋主人メイジャーより<sup>16</sup>」からは、1879年5月に絵画と書籍の印刷をして市場に参入し、さらに1884年に『点石齋画報』を世に送り出したとわかる<sup>17</sup>。

新聞報道を絵画などの視覚情報と共に伝える「画報」の形を用いて世界で最初に行ったのは、イギリスで1842年5月に創刊された『イラストレイテド・ロンドン・ニュース』で、その後フランスの『イリュストラシオン』などが続いた<sup>18</sup>。日本では『風俗画報』などが有名である。中国においては、初期の画報期刊誌について、第一を『小孩月報』<sup>19</sup>、第二を『画図新報』<sup>20</sup>、第三を『寰瀛画報』<sup>21</sup>、第四を『点石齋画報』とする見方と、『点石齋画報』を始まりとするものがある<sup>22</sup>。上海では、『小孩月報』の発行以降、1911年の『時事新報星期画報』の発行までに約30種類の画報が刊行された<sup>23</sup>。

上海は、明代以降に松江府が置かれてから、華東沿岸の貿易商業都市として発展し<sup>24</sup>、1842年8月29日の南京条約の中で、広東、厦門、福州、寧波、上海が、外国商人に対して開港された<sup>25</sup>。当時の上海の人口について、1865年に公共租界工部局と仏租界公董局は初めて租界内の人口の集計を進めたが、これによれば、1865年の公共租界内の外国人は2297人、中国籍住民は90587人で、同年の仏租界内の外国人は460人、中国籍住民は55465人であった<sup>26</sup>。

『点石齋画報』の刊行時期の上海には、公共租界だけで4千人近い外国人がおり、出身はユーラシア大陸全域及びアメリカ大陸に及んだ。

清末時期の中国の識字率については「基礎教養は男女間で大きく異なっており、男性は30－45%が読み書きの能力を有するのに対し、女性はたっ

永崎 道子

〈表4〉1865-1900年の公共租界および筑路区域外の外国人人口統計（単位：人）

	1865年	1870年	1876年	1880年	1885年	1890年	1895年	1900年
イギリス	1372	894	892	1057	1453	1574	1936	2691
アメリカ	378	255	181	230	274	323	328	562
日本		7	45	168	595	386	250	736
フランス	28	16	22	41	66	114	138	176
ドイツ	175	138	129	159	216	244	314	525
ロシア	4	3	4	3	5	7	28	47
インド				4	58	89	119	296
ポルトガル	115	104	168	285	457	564	731	978
イタリア	15	5	3	9	31	22	83	60
オーストリア	4	7	7	31	44	38	39	83
デンマーク	13	9	35	32	51	69	86	76
スウェーデン	27	8	11	12	27	28	46	63
ノルウェー	4	3	4	10	9	23	35	45
スイス	22	7	10	13	17	22	16	37
ベルギー		1	3	1	7	6	21	22
オランダ	27	5	5	5	21	26	15	40
スペイン	100	46	103	76	232	229	154	111
ギリシャ	7	3	2	4	9	5	7	6
朝鮮					1			
トルコ				3	4	18	32	41
ブラジル					4	2		3
イラン					1	1	4	2
その他	6	155	49	57	91	31	302	174
合計	2297	1666	1673	2200	3673	3821	4684	6774

〔出所〕上海租界志編纂委員会編『上海租界志』上海社会科学院出版社、2001年、114-115頁、鄒依仁『旧上海人口変遷的研究』上海人民出版社、1980年、145頁、表56より筆者作成。

た2-10%が有しているにすぎなかった<sup>27)</sup>とあるが、識字率の基準を示すことは困難で、都市と農村の差なども考慮されるべきである。明清時代の教育機関については、主に科挙受験者と貧民を対象としたものに大別できる<sup>28)</sup>。点石齋石印書局で最初に印刷されたのは、『聖諭詳解』<sup>せいゆしょうかい</sup>という科挙試験の参考書であり<sup>29)</sup>、画報の読者とされていた者は、漢字を問題なく読むことの可能な知識人などと考えられる。購読者数についての研究や発行部数についての正確なデータは少ない。また画報1部を1人だけで読んでいたとは断言できず、読者数は比較的多かったと考えられる。天津では、一般民衆を対象とした天津宣講所で、1905年に新聞の読み聞かせが行われていたとされている<sup>30)</sup>。フランスの画報『ル・ユニヴェール・イリュストレ<sup>31)</sup>』の1884年9月6日の記事には、『点石齋

画報』の「越事行成<sup>32</sup>」の記事の転載がみえる<sup>33</sup>。『点石斎画報』の編集側が把握していたのかは不明だが、フランスの紙面では『点石斎画報』を目にする機会が存在していた。1890年1月4日付けの『ライプツィヒ画報』には「上海にはまだいくつかの画報が存在しており、その中で最も重要なのが、『点石斎画報』である。この画報は1885年、中国人によって創刊され、月に3回、それぞれ7千部発行されている<sup>34</sup>」とある。この「7千部発行」という数字は、画報の具体的な刊行数に迫る貴重な数字であるが、「1885年に、中国人によって創刊され…」という記述が、1884年にメイジャーによって創刊された事実と一致しないことから、正確性に疑問は残る。日本の研究でも、発行部数等の正確な数字は示されず、画報の人気は高く発行部数も多いと記されている。

### 第3章 外国関連記事の特徴

『点石斎画報』に登場する国々は、それぞれ中国との関係の深さが異なり、距離は遠いが出身者が租界などに多く住んでいる国、地理的にも歴史的にも結びつきの強い国、地理的に遠く関わりも少ないであろう国などがある。最初に、中国と相手国との距離を焦点に記事をみていく。

中国国内には多くの外国人が居住していた。『点石斎画報』には、租界を含めた中国国内に居住していた外国人についての記事が多くある。「徳のある行い<sup>35</sup>」には、「西洋人もまた道徳的な行いを好むとすることができる」とある。「西洋人巡捕の不法行為<sup>36</sup>」では、「租界の中国人巡捕とインド人巡捕は、権力を笠に着て良民や弱い者を踏み付け、女性をからかい、みだりに人を殴るが、イギリス人巡捕は仕事をし、いちばん真面目である」としている。西洋人男性一連の行動の評価に、徳という中国の価値観が用いられていることや、外国人の出身地などによる先入観や印象の違いが指摘でき、租界の社会問題が浮き彫りとなっている。

永崎 道子

日本や朝鮮といった東アジアの国々は、中国との関係が大変深い。地理的要因から人や物の行き来が盛んで、文化的にも強い繋がりが有る。「外国の試験<sup>37)</sup>」には、「ここで現在の朝鮮の官吏登用の試験の様子を見てみると、不正対策が見あたらない」、「私が考えるに、朝鮮の都の官吏や知識人の文雅なことは、西洋各国よりは上である、おそらく文学を尊んではいるからだろう」とある。科挙を真似た朝鮮の官僚登用制度を挙げて酷評しつつも、西洋の国の文化水準と比較すれば、朝鮮の下に西洋が位置するとしている。朝鮮王朝と中国は冊封関係にあり、科挙を含めた文化や政治の面で関係の深いため、特徴的な外国観がみられる。

日本については「日本の東京にある靖国神社は、戦没者を合祀するところである。先月6日には例大祭があったので、宮内省はあらかじめ勅旨を伝達し、皇后が行幸した<sup>38)</sup>」などと記されている。例大祭は、1896年5月6日に行われ、昭憲皇后が参拝した<sup>39)</sup>。日本についての記事は内容がある程度正確かつ具体的で、また地名などは、国名や地域名から市町村の名前まで詳細に記されている。ただし例えば、「和議画押<sup>40)</sup>」の1885年6月9日の清仏天津条約調印の場面で、日本人が正装として縦縞の着物を着ており、違和感がある。書き手が調印の場面を覗くことはできないため、日本人の正装を知らずに想像で描いたのかもしれない。地理的に近く交流の盛んな東アジアの隣国の情報は比較的正確であり、また中国の伝統を共有する国と認識しており、西洋諸国との比較では文化的に優れていると評価されている。中国が東アジアの中では突出しているとの認識が示されており、自国への強い自信がみえる。

他方、地理的にも中国から遠く離れているアフリカの記事からは、朝鮮や日本に関する記事と異なる印象を受ける。「人鱈<sup>41)</sup>」という記事には、「この土民が信仰する宗教では、他郷の人をあだとみなして、殺して食うことが許されており、そのことで神霊の加護を得るといふ。鱈の皮を羽織って、水辺に潜んで、行きかう船に乗る人を窺い、疲れて横になったところに乗じて、その船に這い上がって、刃物を引き抜いて、喉を刺し、

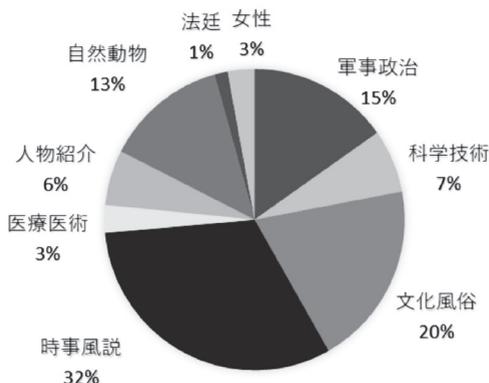
その血を吸う。失血死すると、その肉を割いて生のままか炙って食べる」などとある。先住民が実際に人間を食したのかは定かではなく、また、アフリカということは示されるも、具体的な地名は記されておらず、日本についての記事との差がある。「世間一般で美しさについて述べる時は、雪のような肌、玉のような風貌と言い、みなその白いことを指す。ただアフリカではそれに反している。[アフリカの]人はみな黒い人種で、黒が美しいとされる<sup>42)</sup>」などと、アフリカの美の基準を紹介するものもある。

中国と相手国との距離には、物理的、地理的な距離や、それによって生じる文化的な距離が挙げられる。ここから生じた情報量や想像力の限界が『点石齋画報』における外国関連記事の1つの特徴と言える。

話題別に分析を行うと、歴史的事象との繋がりの見える記事が目立ち、その描かれ方から外国関連記事の特徴を考察できる。その話題の1つが戦争関連の記事である。『点石齋画報』の刊行は、1884年開戦の清仏戦争を契機としている<sup>43)</sup>。絵を用いた報道により、戦況や敵国の性格などが一層現実味を帯びて伝えられた。『点石齋画報』の記念すべき1枚目の記事は、「北ベトナムの交戦<sup>44)</sup>」という記事である。清仏戦争では、1885年6月に天津条約が締結され、清はベトナムに対する宗主権を放棄し、フランスはベトナムを保護国化した。『点石齋画報』の記事では、清軍の戦場での様子は良好であり、フランス軍を翻弄している。清仏戦争の記事は、戦場の様子、条約締結の様子を中心に25枚程度あり、戦争が重要な話題であったことを物語っている。他に日清戦争の記事も全部で約30枚にのぼり、当該時期には日本関連の記事が急速に増えている。どちらの戦争も、年は異なるものの、8月に開戦して翌年の4月に終戦を迎えており、記事の枚数も概ね一致する。清仏戦争時には、相手国のフランス共和国の首相などの紹介記事がないのに対して、日清戦争時の記事には明治天皇や昭憲皇后や大正天皇が紹介されている。戦争相手国の国勢の記事についての差が、フランスに対する知識の少ないためか、あるいは、中国とは異なり王政が停止された第三共和政時期のフランスは詳細な記

永崎 道子

〈表5〉『点石齋画報』の話題



〔出所〕『点石齋画報』大可堂版より筆者作成。

事にしない方が無難であるという、清に対する遠慮なのかは不明である。

『点石齋画報』そのものの内容を分析するにあたり、相手国との関係や記事の話題に焦点を当てることで、国同士の相互理解の不足や記事の増加傾向から外国関連記事の特徴を掴むことができ、外国観を形成する要因が見えてくる。

#### 第4章 西洋関連記事の特徴

第一に、西洋の科学技術については、例えば「観覧台<sup>45</sup>」などの記事がある。それによれば1900年のパリ万国大博覧会に際し不思議な機械が創られたとして「完成した観覧台は、長さ4.2km、高さ15mで、会場の入り口に設置された。来観者は階段で観覧台に登り、観覧台の上には51732人乗ることができ、時速8－9kmで走行でき、徒歩に代わって会場をぐるりと一周することができ、一周50銭」とある。1900年4月から11月まで開催されたパリ万国博覧会では、実際に展示されたのは動く

歩道であり、この絵は絵師の想像によるものと指摘されている<sup>46</sup>。記事部分には自動で動くところがあるが、絵では機関車が押しているようにも見える。未知の科学技術を説明する際には、想像で描かれたであろう絵から、読み手の潜在的な外国観や西洋観に影響を与え、それが真実とは異なる外国の印象として記憶された可能性も指摘できる。

第二に、外科手術や外科的要素の強い西洋医学を描いた記事をみていくと、「アヘンを丸呑みした人が救われる<sup>47</sup>」では、手の施しようがない患者の治療に西洋の医者が呼ばれ、「咽喉科の新しい治療法<sup>48</sup>」では、管を挿して治療した方法が鍼治療の応用として紹介され、『東医宝鑑』の不足を補うと述べられている。他にも、「腸を収め腹に戻す<sup>49</sup>」では、刮骨療毒の古事や兪附と扁鵲の伝説のような、イギリス人医師の外科治療と報酬をもらわない立派な姿勢が示されている。「鼻を削って美を求める<sup>50</sup>」では、アメリカの女優の美容整形の話が、「脳をあけてできものを治療する<sup>51</sup>」では、ニューヨークの頭部外科手術の話、「名医が瘤を取る<sup>52</sup>」では、上海で西洋人女性医師などが奇病の瘤を切り取った話などが紹介されている。いずれの記事も、治療は成功して患者が助かり、医師の人格や技術を褒めている。患者の家族が西洋医を頼みの綱として呼び寄せる場面からは、西洋医の技術への信頼や、西洋医学への高評価がみえる。また他の外国関連記事と異なり、記事の結びで、東洋医学の方が勝っていると言うような、既存の方法を擁護する結論が少なく、西洋医学の話題が比較的純粋に好意的に受け入れられているとわかる。

第三に、女性について見る。画報に登場する女性たちは、中国人であれば、妓女、女工、孝行者の娘、不貞な妻などが多く、西洋人であれば、医師、航海士、女優、夫を社会的に追及する妻などが多く、西洋の女性の活発な姿が描かれている。例えば「アメリカの婦人は船を司る<sup>53</sup>」では、西洋各国では幼い頃から男女ともに塾に入るために西洋女性は書き物や算術に通じている者が多いとして、航海士のアメリカ人女性を紹介している。「独身女性が増える<sup>54</sup>」では、西洋では配偶者を尊び、妾がない

永崎 道子

としながらも、アメリカ北部のマサチューセッツの民衆の数は男性が1割で女性が9割で女性が結婚しづらく、独身女性162人が連名で結婚禁令を止めて妾を置くことを許可してくれるように議政院に請願したことを説明している。「西洋女性の集会<sup>55</sup>」では、中国では男性を重んじ女性を軽んずる風紀があり、それゆえ女性で権力を持つ者は雌鶏が夜明けを告げると嘲られるが、西洋では女性の医師、女性の弁護士、女性の航海士、女性の宮宰なども少なくないとして、イギリスのある法律の不当さを議論する集会参加者の3000人がみな女性であったと紹介している。

纏足については、例えば「天足の会<sup>56</sup>」で、『道山清話』の最後の君主の宮嬪や『南史』の東昏侯の貴妃の潘玉兒を纏足の悪例の始まりと説明する。女性たちの苦しみは、はかり知れないが風習を変えた人はいなかったのだから、西洋女性が道義心の一端で天足の会を作り纏足をやめさせて18cmの天然の足にかえらせようとしたが、中国の長年の習慣は急に変わらず、この意見に背くことになるのではと危惧する。「西洋の女性の足<sup>57</sup>」では、キューバの女性の足は、かつては18cmあまりで、足の皮膚は霜のように白いの美しいとされていたが、今では小さいと貴ばれ、約9－12cmよりも長いものはないと他国の流行を紹介している。

結婚については、例えば「踊りを踊って親交を深める<sup>58</sup>」で、西洋の儀礼では妻を選ぶには、舞踏会で踊りを踊り、交際をしてよく知り合い、女性が相手を好きになった後で婚約して結婚するとし、ふざけた馴れ馴れしい風習ではないかと疑ってしまうが、実際に西洋では重要な儀礼と紹介している。風俗は地域によりけりで、海により遠くへだてられているのだから無理もないとしている。「別の悟り<sup>59</sup>」では、西洋の風習では、男女が結婚するときは、性格を窺い見るとして、あるアメリカ人女性の手紙のやり取りの話を紹介している。「西洋女性の殉節<sup>60</sup>」では、広東の中国人男性がルソン島で結婚した西洋人女性との結婚生活と、彼女が夫に従い殉死した話を紹介し、この賢い西洋人女性の例から、みな西洋女性は贅沢だという説には、議論の余地があると言っている。

男性同様に、社会に進出する西洋女性の姿、伝統的な中国の纏足の文化、結婚における風習の違いなど、画報の記事は、様々な視点で記されており、同じ話題でも結論が指し示す方向は多様である。清末以降の女性の社会進出や、それに反対する保守的な思想の混在を体現したものであり、急進的ではないながらも、旧来の中国社会には見られない新しい女性像を紹介したものと言える。

## 第5章 外国関連記事の比較

本章では、イギリス女王の祝典に関する記事を分析する。イギリスのヴィクトリア女王は、特に1870年代以降、帝国主義の象徴的な存在とされ、1887年のゴールデン・ジュビリー（在位50周年記念式典）と1897年のダイヤモンド・ジュビリー（在位60周年記念式典）では、人気も頂点に達した<sup>61</sup>。ここでは、『点石齋画報』に掲載されている50周年と60周年の記事、また同時期の『申報』の記事を比較する。

『点石齋画報』では、1887年7月中旬に、「英君主像」1図、「慶典図」7図、「灯会」1図の、在位50年の特集が組まれている。「イギリス君主の肖像<sup>62</sup>」には、「イギリス人は君主を褒め称え、中華を封じた陶唐氏を祝うかのようにであった」とある。ヴィクトリアはウィリアム4世の兄弟の娘であるが「女弟」と記され妹という意味となり、史実と異なる点もある。「上海に住むイギリス人はイギリス君主在位50周年祝賀会を訪れる 第一図<sup>63</sup>」には、「西洋人たちは帽子を脱いで歓喜し」、「歌の調子やハーモニーは、人々の君主への敬愛の念を知らせてくれる」とある。「第二図<sup>64</sup>」では、拝経堂での儀式を熟達した習わしを記しており、兵隊たちの服装や持ち物についてわかる。「第三図<sup>65</sup>」の花火などで空の色が赤や緑に変化したという記述から、化学の進歩が示されている。「第四図<sup>66</sup>」では、民間消防団組織の水龍会<sup>67</sup>と山車、「第五図<sup>68</sup>」では、祝賀

永崎 道子

に参加するサーカス団、「第六図<sup>69</sup>」には、貯水塔や電球がそれぞれ登場し、祝いと娯楽の様子が紹介されている。「第七図<sup>70</sup>」では、ガラス灯の電光が下を照らしている。赤緑青紫と目まぐるしく変わる様子を匡廬の滝、赤城の朝焼けや夕焼けと表現している。祝賀中の上海の街の様子を中国人の目線で見ると、西洋文化のどの部分に興味を持っているのか知ることができ、文化、技術、動物などの観点で西洋文化を観察していたとわかる。また同時に、話題になる西洋文化についての悪い印象が少ないこともわかる。最後の「漢口租界イギリス領事署の懸鐘図<sup>71</sup>」には、イギリス領事館が電灯で飾り付けられ、「御極艾年」、「萬民同慶」と貼られている。「艾年」とは50年の意味である。絵は、中国における西洋人の姿を捉えており、記事には、写真を模写して画報に用いるとあり、編集者側の工夫や当時の印刷技術の一端がうかがえる。

一方で、『申報』に記載が見えるのは、祝賀日の翌日1887年6月21日で、「英国皇在位五十年祝詞」、「慶典大備」の2つの記事がある。「イギリス皇帝在位50年の祝辞<sup>72</sup>」には、「今日、清とイギリスはますます睦まじく、両国の勅使は首都に駐在し、通商を保護し、商民はみな日々友好を深め、商業は日に盛んになっている。願うのは大君主の子孫もそれを受け継ぎ、清とイギリスの2国が互いに助け合って、限らない幸福を獲得することだ」とある。また、「慶典大備<sup>73</sup>」では、租界のイギリス商館が灯籠などを用いて飾りつけする様子が記されている。

『点石斎画報』のヴィクトリア女王の在位60周年関連記事は、「航海奇観」1図、「龍姿鳳彩」1図、「演龍行慶」1図、「西童賽馬」1図、「賽脚踏車」1図がある。発行時期は明確にはわからないが、1897年6月20日の記念日以降である。ただし、上海以外に香港の祝賀の様子などを扱っており、関心の高さに変化は見られないようである。「航海の珍しい光景<sup>74</sup>」には、「香港では5月23日に慶典が挙行され、海にすべての船が並んで鑑賞され、巡理府の屈太守によって立案された小蒸気船のお祭りが開かれた」とあり、イギリスと清の親密さや良好な関係が感じられる。

「龍の姿に鳳凰の彩<sup>75</sup>」のヴィクトリアの肖像は、写真を利用して描かれたとわかる。在位50周年時には「写真の利用が上手くいかず模写をすることとなり悔やまれる」という旨があり、技術的な進歩の可能性もある。「龍を演じる祝いの行列<sup>76</sup>」では、在位60周年をダイヤモンドと西洋式に記している。「西洋の子供は競馬をする<sup>77</sup>」には、「轡を並べて同じ速さで駆けて、騎馬術を披露し…(中略)…これは騎馬術の競争では普通だが、子供がやっているというのは、我が中国の及ばぬところである。[西洋で]人の才能が盛んになるのにはこのような理由があるのだ」とある。また「自転車で競走する<sup>78</sup>」では、西洋人たちが自転車に乗る様子から、ドイツ軍の自転車部隊へと話を展開している。

『申報』では、祝賀日の2日後の1897年6月22日に、3つの記事が掲載されている。「イギリス皇后ヴィクトリア本紀<sup>79</sup>」には、「ヴィクトリアが困難や危険にたびたび遭遇しながらも、このように長期間君主として君臨しているのは、ヨーロッパの中でも、フランスの君主ルイ14世に負けないほどの輝かしさである」とある。祝賀に際して租界が賑わう様子やイギリス皇后ヴィクトリアの経歴が詳細に掲載されており、夫や子供たちの話なども登場する。「預備慶典<sup>80</sup>」には、浦灘一帯での祝賀の様子が、「慶賀停公<sup>81</sup>」には、江海新關と各銀行の休業の旨を報道している。

『申報』の1897年の在位60周年の記事の興味深いのは、ヴィクトリア女王に対して空格が使用されていることである。空格とは擡頭の一種である。文中に現皇帝や皇室に関わる語句が登場した際に、改行し該当語句を他の文頭より高い位置から書き出して敬意を示すもので、何文字擡頭するので、単擡、双擡、三擡と分かれ、改行せずに行中で一字空ける場合に空格という<sup>82</sup>。このような、ヴィクトリア女王への空格は、在位50周年の『申報』の記事では見られず、『点石齋画報』の文字部分では、在位50周年、在位60周年のどちらでも見られない。『点石齋画報』ではそもそも、他国の君主に対しての擡頭や空格は見られないが、「西使觀光<sup>83</sup>」や「傳相逸事<sup>84</sup>」などで、西太后に対しての使用が認められる。

永崎 道子

また『点石斎画報』の外国関連記事では、光緒帝がなかなか登場せず、擡頭や空格を確認することが出来なかった。

50周年と60周年の記事で『点石斎画報』の外国観はどのように変化したのか。まず、上海の街での祝賀の様子や祝賀の方法についての目立った変化はない。しかし、文字部分の運びは、目の前で起きた事象や外国の印象を捉えるものから、外国から何を学ぶかという描き手あるいは編集側の意識が表れるものへと変化し、やや堅苦しい教訓めいた内容になっている。在位60周年の絵の中に日の丸が見えないのは、考えすぎである

〈表6〉『申報』と『点石斎画報』の記事の比較

		『申報』	『点石斎画報』
即位50周年 1887年6月20日 (光緒13年閏4月29日)	日付	1887年6月21日(光緒13年5月1日)	1887年7月中旬(光緒13年5月下旬)
	話題	場所：上海 英君主紹介、上海の祝賀の様子、灯籠や飾りつけ ヴィクトリアの経歴：誕生日、即位日、聡明仁智、語学堪能、勤勉、アフリカとの外交、清との通商、夫についてとその死(喪に服す)、子供(男4女5)	場所：上海 英君主紹介、大砲による祝賀(商国訓練兵など)、西洋人は脱帽、西洋音楽、礼拝の儀式、花火、水龍会(消防団)の山車、サーカスのパレード、水台(給水用の水道管、取水塔)、櫓台、街並みの灯籠や色鮮やかな飾り付け、イギリス領事館での点灯式典 ヴィクトリアの経歴：ウィリアム4世の妹とある、誕生日、即位日、白い喪服で即位、夫についてとその死、子供(男4女5)、孫(男女31)、ひ孫(男女6)
	文字部分	外国君主への空格なし	外国君主への空格なし
	絵部分		特集が組まれている 似顔絵が実物と程遠い
即位60周年 1897年6月20日 (光緒23年5月21日)	日付	1897年6月22日(光緒23年5月23日)	1897年6月22日(光緒23年5月23日)以降
	話題	場所：上海 英君主紹介、上海の祝賀の様子、銀行の祝日休暇 ヴィクトリアの経歴：ウィリアム4世の姪、白い喪服で即位の詳細、暴徒に襲われた事件の詳細(暴徒を死刑から終身刑へ)、子供(男4女5)	場所：香港、上海 英君主紹介、中国人が立案した船による祝賀式典、各国外交官が祝賀式典に参加、電気の灯籠や灯籠や色鮮やかな飾りつけ、水龍会の山車、西洋人は脱帽と拍手、娯楽の場の警備、踊り、競馬場、子供たちの乗馬、祝賀で集まり自転車に乗る人々、ドイツ軍の自転車の軍事利用 ヴィクトリアの経歴：誕生日、即位日、子供(男4女5)、孫(男女30余り)、ひ孫(男女10余り)、気品高く長寿 ダイヤモンド祝賀と表記あり 教訓めいた記事の結び(少し堅苦しい印象)
	文字部分	外国君主へ空格を使用	外国君主への空格なし
	絵部分		似顔絵が実物に近い(写真を参考か) 絵がより詳細かつ絵の線が濃くなった

〔出所〕『申報』、『点石斎画報』大可堂版より筆者作成。

うか。この10年の間には1894年の日清戦争などがあり、中国の対外姿勢は大きく変化したと言われている。他に、1890年から1894年にかけての出使期には、西洋を観察し、中西両文明の根底にある異質な価値観への認識が蓄積したという指摘もある<sup>85</sup>。また技術面では、写真の利用の精度が向上しており、これが絵師の技量によるものか、印刷技術についての進歩があったのかは不明ではある。さらに、『点石齋画報』は、街中での祝賀の様子について詳しく、視覚的な効果が大きい。一方で『申報』は、女王の経歴について、聡明、勤勉で語学力が高いなどと詳細に記し、外交や政治への言及がある。また『申報』では外国の君主に空格が利用されるなどの違いがみられる。

## おわりに

『点石齋画報』にみえる外国観は、同時代の知識人が有していた外国観の歩みと比較した時、その先頭を進むような革新的なものではないが、知識人を含めた『点石齋画報』の読み手たちを惹きつける新鮮さと発見に満ちていたと言える。

本稿は、清末の中国人が肌で感じた「外国」あるいは「外国観」を明らかにしようとするものである。清末史では、アヘン戦争や日清戦争が契機となって、中国と諸外国との関係が段階的に変化することが知られている。画報にみる外国観については、この道筋から飛び出して目にも驚きの成果をあげるように軽快には進まなかった。史料に対しては、まず量的に分析分類し、次に、様々な切り口で眺めることで、記事に描かれる話題の種類以外での共通点を探すことに努め、編集や描き手に迫るための史料の不足などの問題が見えてきた。また、本稿の問題意識は、時として歴史の変動の中で忘れられやすい、権力を手にしていない清末の人々の外国観に迫ることにあつた。『点石齋画報』を分析することから、

永崎 道子

記事の言葉の中の小さな突破口を見つけることの難しさを感じ、力の及ばぬ点もあったが、画報の分析においては、近年立て続けに出版されている先行研究に倣い、大変参考となり学ぶことが多かった。忘れてはならないのは『点石齋画報』がイギリス人の手で刊行されたという事実であり、『点石齋画報』を含めた画報の詳細な分析から、中国とイギリス、あるいはそれ以外の国との、出版物を介した静かな思惑を見つける可能性が期待できるとわかった。この点については、方法を模索しながらも、引き続き検討の余地があるだろう。

<sup>1</sup> 例えば、「大可堂版の第1巻の第1番の番号の画報」は、「1-1」と示す。引用文中の [ ] は筆者の補足解説である。

<sup>2</sup> Ernest Major, 1830年-1908年3月。白瑞華 (Roswell Sessoms Britton) 著 / 蘇世軍訳『中国近代報刊史』中央編訳出版社、2013年、83-96頁。

<sup>3</sup> 中野美代子・武田雅哉『世紀末中国のかわら版』福武書店、1989年、9頁。

<sup>4</sup> 大阪資料・古典籍室1小展示、第62回中国の絵入新聞『点石齋画報』展関連ページ

[https://www.library.pref.osaka.jp/nakato/shotenji/62\\_gaho.pdf](https://www.library.pref.osaka.jp/nakato/shotenji/62_gaho.pdf) (2020年1月12日22:15検索)。

<sup>5</sup> 尊聞閣主人『点石齋画報』(甲1第1号-己9第69号)、上海申報館申昌書画室、1884年-1886年。

<sup>6</sup> 『申報』(1884年5月8日、光緒10年4月14日)。

<sup>7</sup> 石曉軍『「点石齋画報」にみる明治日本』東方書店、2004年、13頁。

<sup>8</sup> 相田洋『清末の絵入り旬刊紙「点石齋画報」の基礎研究』福岡教育大学研究成果報告書、福岡教育大学、2001年。

<sup>9</sup> 石前掲『「点石齋画報」にみる明治日本』、11頁。

<sup>10</sup> 三山陵編『フルカラーで楽しむ中国年画の小宇宙』勉誠出版、2013年、2-4頁。

<sup>11</sup> 中野・武田前掲『世紀末中国のかわら版』、16-17頁。呉については、鄭逸梅「呉友如和『点石齋画報』」『鄭逸梅選集』第2巻、黒竜江人民出版社、1991年、299-300頁や、若杉邦子「年画師・呉友如について」吉田富夫先生退休記念論集委員会編『吉田富夫先生退休記念中国学論集』汲古書院、2008年、237-250頁にも記載がある。

<sup>12</sup> 『申報』(1884年6月4日、光緒10年5月11日)。

<sup>13</sup> 蘇精『鑄以代刻』北京中華書局、2018年、281頁。

<sup>14</sup> 小林宏光『中国版画史論』勉誠出版社、2017年、405頁。

- <sup>15</sup> 瀧本弘之「画家呉友如と清末のジャーナリズム展開」日中藝術研究会『日中藝術研究』第34巻、1996年、67頁。
- <sup>16</sup> 『申報』（1879年7月27日、光緒5年6月9日）。
- <sup>17</sup> 韓叢耀『中国近代図像新聞史』南京大学出版社、2012年、326頁。
- <sup>18</sup> 趙省偉主編『西洋鏡』広東人民出版社、2018年、1－2頁。
- <sup>19</sup> 『小孩月報』は、キリスト教布教宣伝のため1872年2月に福州で、正式には1875年3月に上海の清心書局出版から刊行。1914年に停刊。
- <sup>20</sup> 『画図新報』は、キリスト教布教の目的で1880年に上海の清心書局出版から刊行。1921年に停刊。
- <sup>21</sup> 『寰瀛画報』は、1877年に上海の申報館から刊行。中国初の石版印刷による画報とされる。1880年停刊。
- <sup>22</sup> 石峰編『中国期刊史』人民出版社、2017年、257頁。
- <sup>23</sup> 前山加奈子「『図画日報』にみる清末上海の働く女性たち」中国女性史研究会編『中国のメディア・表象とジェンダー』研文出版、2016年、77-166頁。
- <sup>24</sup> 高橋孝助・古厩忠夫編『上海史』東方書店、1995年、99頁。
- <sup>25</sup> ハックス・ポット著/帆足計・浜谷満雄共訳『上海の歴史』白揚社、1940年、16頁。
- <sup>26</sup> 上海租界志編纂委員会編『上海租界志』上海社会科学院出版社、2001年、90頁。
- <sup>27</sup> Evelyn Sakakida Rawski, *Education and Popular Literacy in Ch'ing China*, The University of Michigan Press, 1979, p.23.
- <sup>28</sup> 戸部健『近代天津の「社会教育」』汲古書院、2015年、39頁。
- <sup>29</sup> 石前掲『『点石齋画報』にみる明治日本』、10頁。
- <sup>30</sup> 戸部前掲『近代天津の「社会教育」』、42頁。
- <sup>31</sup> 『ル・ユニヴェール・イリュストレ』、仏語名は *L'univers Illustré*、中国語名は環球画報。
- <sup>32</sup> 『点石齋画報』大可堂版、1－18（1884年5月下旬、光緒10年5月上旬）。以下『点石齋』とする。
- <sup>33</sup> *L'univers Illustré*, 6<sup>th</sup>September1884, p.5.  
<https://gallica.bnf.fr/ark:/12148/bpt6k5735366v/f5.item>（2020年1月12日22:30検索）
- <sup>34</sup> フリッツ・ファン・ブリエッセン著/白瀬幸子訳/武田雅哉注『『上海の画報1884-1898』序』『饕餮』第6号、1998年、89頁。
- <sup>35</sup> 『点石齋』、1－96（1884年8月上旬、光緒10年6月下旬）。
- <sup>36</sup> 『点石齋』、7－116（1890年7月上旬、光緒16年5月中旬）。
- <sup>37</sup> 『点石齋』、4－233（1887年12月中旬、光緒13年11月上旬）。
- <sup>38</sup> 『点石齋』、13－156（1896年6月中旬、光緒22年5月上旬）。

永崎 道子

- <sup>39</sup> 石前掲『「点石齋画報」にみる明治日本』、106 - 107 頁。
- <sup>40</sup> 『点石齋』、2 - 56（1885年6月中旬、光緒11年5月中旬）。
- <sup>41</sup> 『点石齋』、15 - 6（1898年1月、光緒23年12月以降）。
- <sup>42</sup> 『点石齋』、6 - 39（1889年4月下旬、光緒15年3月下旬）。
- <sup>43</sup> 中野・武田前掲『世紀末中国のかわら版』、19 頁。
- <sup>44</sup> 『点石齋』大可堂版、1 - 1（1884年5月8日、光緒10年4月14日）。
- <sup>45</sup> 『点石齋』、14 - 317（1897年1月、光緒22年12月以降）。
- <sup>46</sup> 中野・武田前掲『世紀末中国のかわら版』、176 - 177 頁。
- <sup>47</sup> 『点石齋』、1 - 299（1885年4月上旬、光緒11年2月中旬）。
- <sup>48</sup> 『点石齋』、5 - 9（1888年4月上旬、光緒14年2月下旬）。
- <sup>49</sup> 『点石齋』、4 - 120（1887年8月中旬、光緒13年6月下旬）。
- <sup>50</sup> 『点石齋』、11 - 37（1894年1月、光緒19年12月以降）。
- <sup>51</sup> 『点石齋』、15 - 20（1898年1月、光緒23年12月以降）。
- <sup>52</sup> 『点石齋』、12 - 6（1895年1月、光緒20年12月以降）。
- <sup>53</sup> 『点石齋』、3 - 197（1886年4月、光緒12年3月中旬）。
- <sup>54</sup> 『点石齋』、5 - 135（1888年9月中旬、光緒14年8月中旬）。
- <sup>55</sup> 『点石齋』、10 - 111（1893年5月下旬、光緒19年4月中旬）。
- <sup>56</sup> 『点石齋』、12 - 109（1895年5月上旬、光緒21年4月中旬）。
- <sup>57</sup> 『点石齋』、7 - 82（1890年6月上旬、光緒16年4月中旬）。
- <sup>58</sup> 『点石齋』、6 - 155（1889年8月下旬、光緒15年8月上旬）。
- <sup>59</sup> 『点石齋』、8 - 307（1892年1月下旬、光緒17年12月下旬）。
- <sup>60</sup> 『点石齋』、9 - 163（1892年9月上旬、光緒18年7月中旬）。
- <sup>61</sup> 木畑洋一・秋田茂等編著『近代イギリスの歴史』ミネルヴァ書房、2011年、104 - 105 頁、116 頁。
- <sup>62</sup> 『点石齋』、4 - 91（1887年7月中旬、光緒13年5月下旬）。
- <sup>63</sup> 『点石齋』、4 - 92（1887年7月中旬、光緒13年5月下旬）。
- <sup>64</sup> 『点石齋』、4 - 93（1887年7月中旬、光緒13年5月下旬）。
- <sup>65</sup> 『点石齋』、4 - 94（1887年7月中旬、光緒13年5月下旬）。
- <sup>66</sup> 『点石齋』、4 - 95（1887年7月中旬、光緒13年5月下旬）。
- <sup>67</sup> 高嶋航「水龍会の誕生」『東洋史研究』（京都大学）第56巻第2号、1997年、235 - 273 頁。
- <sup>68</sup> 『点石齋』、4 - 96（1887年7月中旬、光緒13年5月下旬）。
- <sup>69</sup> 『点石齋』、4 - 97（1887年7月中旬、光緒13年5月下旬）。
- <sup>70</sup> 『点石齋』、4 - 98（1887年7月中旬、光緒13年5月下旬）。
- <sup>71</sup> 『点石齋』、4 - 99（1887年7月中旬、光緒13年5月下旬）。
- <sup>72</sup> 『申報』（1887年6月21日、光緒13年5月1日）。

- <sup>73</sup> 『申報』(1887年6月21日、光緒13年5月1日)。  
<sup>74</sup> 『点石齋』、14 - 164 (1897年6月20日、光緒23年5月21日以降)。  
<sup>75</sup> 『点石齋』、14 - 172 (1897年6月20日、光緒23年5月21日以降)。  
<sup>76</sup> 『点石齋』、14 - 173 (1897年6月20日、光緒23年5月21日以降)。  
<sup>77</sup> 『点石齋』、14 - 174 (1897年6月20日、光緒23年5月21日以降)。  
<sup>78</sup> 『点石齋』、14 - 175 (1897年6月20日、光緒23年5月21日以降)。  
<sup>79</sup> 『申報』(1897年6月22日、光緒23年5月23日)。  
<sup>80</sup> 『申報』(1897年6月22日、光緒23年5月23日)。  
<sup>81</sup> 『申報』(1897年6月22日、光緒23年5月23日)。  
<sup>82</sup> 岸本美緒『地域社会論再考』研文出版、2012年、214 - 215頁。  
<sup>83</sup> 『点石齋』、11 - 299 (1894年1月、光緒19年12月以降)。  
<sup>84</sup> 『点石齋』、14 - 146 (1897年1月、光緒22年12月以降)。  
<sup>85</sup> 手代木有児『清末中国の西洋体験と文明観』汲古書院、2013年、71 - 102頁。

## 参考文献

### ■史料

尊聞閣主人『点石齋画報』(甲1第1号-己9第69号)、上海申報館申昌書畫室、1884年-1886年

鄭為編『点石齋画報時事画選』中国古典芸術出版社、1958年

張奇明等編『点石齋画報』大可堂版(第1-15卷)、上海画報出版社、2001年

葉漢明・蔣英豪・黃永松『点石齋画報通檢』商務印書館、2014年

葉漢明・蔣英豪・黃永松『点石齋画報全文校点』商務印書館、2014年

雕龍中国早期報刊『点石齋画報』凱希メディアサービス、2013年

『申報：影印本』上海書店、1983-1985年

### ■中国語単行本

白瑞華著/蘇世軍訳『中国近代報刊史』中央編訳出版社、2013年

陳平原・夏曉虹編著『図像晚清「点石齋画報」』東方出版社、2014年

陳平原『図像晚清「点石齋画報」之外』東方出版社、2014年

陳平原『左図右史と西学東漸—晚清画報研究』三聯書店、2008年

韓叢耀等著『中国近代図像新聞史1840-1919』南京大学出版社、2012年

荊詩索・柯岩初編『帝国崩潰前の影像—晚清連環画中の晚清社会』山西人民人民出版社、2011年

上海租界志編纂委員会編『上海租界志』上海社会科学院出版社、2001年

沈弘編訳『遺失在西方的中国史「倫敦新聞画報」記録の晚清1842-1873』北

永崎 道子

京時代華文書局、2014年

李紅利・趙麗莎編訳『遺失在西方的中国史 法国「小日報」記録の晚清1891—1911』北京時代華文書局、2015年

李小玉・趙省偉編訳『遺失在西方的中国史 法国彩色画報記録の中国1850—1937』中国計划出版社、2015年

石峰編『中国期刊史』人民出版社、2017年

蘇精『鑄以代刻—十九世紀中文印刷變局』北京：中華書局、2018年

唐納德・曼尼著/張省偉編/彭金枝・栞曉敏訳『西洋鏡 一个英国風光攝影大師鏡頭下的中国』広東人民出版社、2018年

夏曉虹『晚清上海片影』上海古籍出版社、2009年

薛理勇『上海閑話交関』上海辞書出版社、2007年

張文献編『美国画報上的中国1840—1911』北京大学出版社、2017年

趙省偉編/侯芙瑤・邱麗君訳『遺失在西方的中国史 海外史料看庚子事変』重慶出版社、2018年

趙省偉主編/張霞・李小玉訳『西洋鏡 法国画報記録の晚清1846—1885』広東人民出版社、2018年

鄭建麗『晚清画報的圖像新聞学研究1884—1912以「点石齋画報」為中心』広西師範大学出版社、2015年

■中国語論文

鄭逸梅「吳友如和『点石齋画報』」『鄭逸梅選集』黑竜江人民出版社、1991年

■英語単行本

Evelyn Sakakida Rawski, *Education and Popular Literacy in Ch'ing China*, The University of Michigan Press, 1979.

■日本語単行本

岸本美緒『地域社会論再考—明清史論集2』研文出版、2012年

木畑洋一・秋田茂等編著『近代イギリスの歴史—16世紀から現代まで—』ミネルヴァ書房、2011年

小林宏光『中国版画史論』勉誠出版社、2017年

ハックス・ポット著/帆足計・浜谷満雄共訳『上海の歴史：上海租界発展史』白揚社、1940年

石曉軍『「点石齋画報」にみる明治日本』東方書店、2004年

相田洋『清末の絵入り旬刊紙「点石齋画報」の基礎研究』福岡教育大学研究成果報告書、福岡教育大学、2001年

相田洋『中国妖怪・鬼神図譜—清末の絵入雑誌「点石齋画報」で読む庶民の信仰と俗習』集広舎、2015年

高橋孝助・古厩忠夫編『上海史 巨大都市の形成と人々の営み』東方書店、

1995年

瀧本弘之・戦暁梅編『近代中国美術の胎動』勉誠出版、2013年

武田雅哉『清朝絵師呉友如の事件帖』作品社、1998年

武田雅哉『「鬼子」たちの肖像—中国人が描いた日本人』中央公論新社、2005年

武田雅哉『楊貴妃になりたかった男たち—「衣服の妖怪」の文化誌』講談社、

2007年

手代木有見『清末中国の西洋体験と文明観』汲古書院、2013年

戸部健『近代天津の「社会教育」—教育と宣伝のあいだ』汲古書院、2015年

中野美代子・武田雅哉『世紀末中国のかわら版—絵入新聞「点石齋画報」の世界』

福武書店、1989年

三山陵編『フルカラーで楽しむ中国年画の小宇宙—庶民の伝統藝術』勉誠出版、

2013年

■日本語論文

高嶋航「水龍会の誕生」『東洋史研究』（京都大学）第56巻第2号、1997年

瀧本弘之「画家呉友如と清末のジャーナリズム展開—『申報』と『点石齋画報』の側面」日中藝術研究会『日中藝術研究』第34巻、1996年

フリッツ・ファン・ブリエッセン著/臼渕幸子訳/武田雅哉注『上海の画報1884-1898』序『饗養』第6号、1998年

前山加奈子『『図画日報』にみる清末上海の働く女性たち』中国女性史研究会編『中国のメディア・表象とジェンダー』研文出版、2016年

若杉邦子「年画師・呉友如について」吉田富夫先生退休記念論集委員会編『吉田富夫先生退休記念中国学論集』汲古書院、2008年

■インターネットページ

大阪資料・古典籍室1小展示、第62回中国の絵入新聞『点石齋画報』展関連ページ

[https://www.library.pref.osaka.jp/nakato/shotenji/62\\_gaho.pdf](https://www.library.pref.osaka.jp/nakato/shotenji/62_gaho.pdf) (2020年1月12日22:15検索)

*L'univers Illustré*, 6<sup>th</sup>September1884, p.1.

<https://gallica.bnf.fr/ark:/12148/bpt6k5735366v/f1.item> (2020年1月12日22:30検索)

*L'univers Illustré*, 6<sup>th</sup>September1884, p.5.

<https://gallica.bnf.fr/ark:/12148/bpt6k5735366v/f5.item> (2020年1月12日22:30検索)